

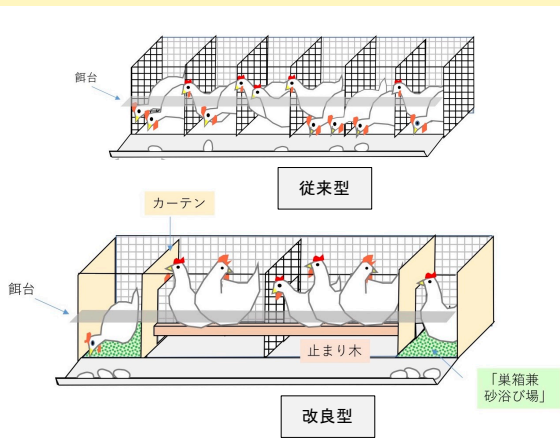


## 趣意

私たちは日々、スーパーで食材を買い、調理して食事をしますが、その食材の由来について考えることはあまりありません。日本人は寿司が好きですが、寿司は基本にご飯の上に生の魚が載せてあります。その魚は海に生きる野生の魚です。しかし、牛肉や卵となると、野生動物ではなく、家畜です。家畜は現代の大量消費に対応するために、多数が効率的に飼育されています。生産者は収益をあげるために、できるだけ多数の家畜を、できるだけ安く育てようとするため、家畜の飼育環境が劣悪になることがあります。

その行き過ぎの実態を明らかにしたのが1964年にイギリスで出版された「アニマル・マシーン」で、飼育家畜の飼育環境の劣悪さを告発しました。こうした流れは家畜の飼育のあり方に見直しを迫り、それは「アニマルウェルフェア」と呼ばれるようになりました。本学の動物行動管理学研究室の田中智夫教授は、我が国でいち早くこの問題を取り上げ、先駆的な研究を進めて来られました。今回は田中先生にご指導いただき、アニマルウェルフェアの現状や将来について紹介する企画展示となりました。

ヨーロッパのキリスト教世界では人間が世界を支配すると考えていたので、動物には魂がないとみなしていました。そのため、例えば「牛攻め」といって牛を繋いで犬をけしかけて苦しむのを見て楽しむというようなことが行われた時代があります。ブルドッグ(ブルは牛、ドッグは犬)はそのために改良された犬です。



こうしたことへの反省に立って、飼育動物の環境改善が進むようになり、劣悪な飼育が法的に禁じられるようになりました。

田中先生はぎゅうぎゅうづめで飼育するニワトリケージを、仕切りを取り外したり、止まり木をつけるなどして住みやすいものにしました。それによってニワトリ本来の行動をするなど良い影響があることが確認されました。

もともと私たちが利用する動物に良い環境で暮らして欲しいと思うのは自然なことですが、経済効率が求められすぎて動物が苦しむことがあり、それに見直しがされるようになりました。このような動きがさらに進むことが期待されます。

